

# *The Horse and His Boy*における聖霊の働き

岡 田 理 香

## The Holy Spirit in *The Horse and His Boy*

OKADA Rika

### 序

チャールズ・ディケンズの *Oliver Twist* を見ると、英国の子供たちの悲惨な孤児院生活を垣間見ることが出来る。飢餓や虐待などの状況が描かれた後、主人公が新しい生活を始めるハッピー・エンドとなっている。このようなプロットは旧約聖書にその典型的なものが見られ、捨てられたモーセが王女に拾われて育てられる話が思い起こされる。さらにシェイクスピアの *Cymbeline* やヘンリー・フィールディングの *Tom Jones* にも、この「失われた子供」のプロットを見ることが出来る。子供たちは困難や旅を経て、自分自身を探り求め、最後に本当の「自己」に到達する<sup>1</sup>。

C. S. ルイスはこのようないくつかのモチーフを使い、主人公のアイデンティティを追求める物語を書いた。それが「ナルニア国物語シリーズ」の *The Horse and His Boy* (『馬と少年』) である。この作品の主人公 Shasta は旧約聖書のヨセフと類似している点がある。それは幼い頃に家を離れなければならなくなったことや、実の家族たちが困難に窮していた際に救いとなったこと、最後に父親や家族と再会したというプロットである。

*The Horse and His Boy* はシリーズの出版順では五作目に当たるが Narnia の年代順では三番目に該当する。Narnia 暦で 1014 年頃、*The Lion, the Witch and the Wardrobe* (『ライオンと魔女』) の時代の Peter とその弟、姉妹たちが Narnia を治めている黄金時代であった。彼らはこの作品では中心人物ではないものの、主人公 Shasta にとって重要な役割を担う。

『ライオンと魔女』においてルイスはキリストの役割を明確に描いた。さらに後年の『魔

<sup>1</sup> Frye, Northrop, *The Educated Imagination*, Bloomington, Indiana University Press, 1963, p.42.

術師の甥』では神の姿が描かれている。キリスト教において、またルイスの信じる神においては、神・キリスト・聖霊の三位一体の神格を持つ神が描かれ、ルイス自身の信仰を作品に読み取ることができる。

本稿においては三位一体の中でも聖霊の働きが見られる、*The Horse and His Boy* を読み、キリスト教の聖霊の役割が見られることについて考察する。

## 1. 三位一体とは

キリストの死後の最初の二世紀の間、キリスト教徒は教会ごとに小集団を作って活動していた。やがて聖職者の位階制が生まれると、教義の統一が必要となってきた。司教たちは会議を開いては何が正しい教義かを決め、それ以外の解釈は異端とみなしていた。

コンスタンティヌス帝は313年にキリスト教を公認宗教としたものの、教義についての論争が継続していることに頭を悩ませていた。特にアリウス主義とアタナシオスとの論争が白熱する中、コンスタンティヌス帝はその論争を終結させるべく、ニケア公会議を開いたのである。325年のニケア公会議で論点的となったのは、キリストが神と等しいか、キリストは被造物なのか、どの程度の地位なのかということ、さらには「神とキリストと聖霊」の三位一体説が論争の中心となった<sup>2</sup>。

公会議では主にアリウス主義とアタナシオスとが議論を交わした。アリウス主義の主張では、神とキリスト（子）は区別されるもので、キリストは父によって無から創造されたため、それ以前は存在していなかったと主張した。キリストは神的であるが、完全な神性ではなく、被造物の中で最も大いなる者かつ最初の者であるという主張だった。その内容は以下のように集約される<sup>3</sup>。

1. The Son is a creature, who, like all other creatures, derives from the will of God.
2. The term “Son” is thus a metaphor, an honorific term intended to underscore the rank of the Son among other creatures. It does not imply that Father and Son share the same being or status.
3. The status of the Son is itself a consequence of the will of the Father, it is not a consequence of the nature of the Son, but of the will of the Father.

こうしてアリウス主義者たちはキリストを神と等しいものとは捉えていなかった。

一方でアタナシオスは以下のようにアリウス主義に反論していた<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> McGrath, Alistair, E., *Historical Theology: an Introduction to the History of Christian Thought*, Oxford, Blackwell, 1998, pp.33-34, 49-50, 61.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.49.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p.50.

1. No creature can redeem another creature.
2. According to Arius, Jesus Christ is a creature.
3. Therefore, according to Arius, Jesus Christ cannot redeem humanity.

アタナシオスは、キリストには完全な神性があり、神と等しい存在であると主張した。アタナシオスは贖罪について言及し、キリストが神である故に十字架を信じるだけで救われると考えた。そして十字架の贖いの価値を評価し、キリストの完全な神性を主張、神とキリストは等しい存在であるとした<sup>5</sup>。

1. Only God can save.
2. Jesus Christ saves.
3. Therefore Jesus Christ is God.

このようにニケア公会議で議論の的となったのは、キリストは神のような人間だったのか (*homoi-ousios* (like in being with the Father)) あるいは神と等しいのか (*homo-ousios* (the same kind of substance as God)) ということであった。325年のニケア公会議は二ヶ月に渡って討議し続けられた。結果としてアリウス主義は退けられ、アタナシオスが勝利を得て、神とキリストは等しい存在であるという結論を下したのである。

アタナシオスは神とキリストが等しい存在である主張の下で三位一体説を擁護した。三位一体説の概念は、新約聖書でパウロが執筆した手紙が基とされ、「神 (父)・キリスト (子)・聖霊」の三神格が等しく、異なる働きをしながらも同一の神格とされている<sup>6</sup>。

May the grace of the Lord Jesus Christ and the love of God, and the fellowship of the Holy Spirit be with you all. (Corinthian II 13:14)

三位一体についての議論は現在に至るまで継続しており、キリスト教神学上、難解な概念の一つでもある。その概要は以下のように言及される。

- 1 The one God is revealed in the manner of creator and lawgiver. This aspect of God is referred to as “the Father.”
- 2 The same God is then revealed in the manner of a saviour, in the person of Jesus Christ. This aspect of God is referred to as “the Son.”

<sup>5</sup> *Ibid.*, p.50.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p.61.

- 3 The same God is then revealed in the manner of the one who sanctifies and gives eternal life. This aspect of God is referred to as “the Spirit”.<sup>7</sup>

ルイスを含めキリスト教信徒たちが捉える三位一体は、聖霊が神の神格を持ち、神の性質を個々人に示すことが可能であること、そして聖霊はキリストの贖罪を理解させる働きを成していること、さらに聖霊により道徳的に個々人を向上させる日常生活へと導いていることが可能ということである。それはヨハネの手紙に書かれている聖霊の性質に基づいている。

I will ask the Father, and he will give you another Counsellor to be with you forever. (John 14:16)

The Counsellor, the Holy Spirit, whom the Father will send in my name, will teach you all things and will remind you of everything I have said to you. (John 14:26)

そのため、ルイスは以下のような概念を持っていたと思われる。

1. God = Christ
2. Christ = the Holy Spirit
3. therefore; God = Christ = the Holy Spirit

ルイスはキリスト教信仰を持ち、そこに含まれる三位一体の概念を持ち、その考えが作品に表われた。特に *The Horse and His Boy* では、聖霊の性質について描くことに成功している。次節ではこの作品から、ルイスの示した聖霊の働きを考察していくこととする。

## 2. 旅路

物語は Narnia から離れた Calormen の南の入り江から始まる。そこでは Narnia と異なり、動物たちは口を利くことが出来ない。その町に Shasta という少年が漁師の父と共に住んでいた。Shasta は家の仕事を手伝わされ、時には殴られ、ひどい扱いを受けていた。彼はいつも北方に強い憧れを感じ、北の方を眺めて暮らしていた。

Shasta was not at all interested in anything that lay south of his home — . But he was very interested in everything that lay to the North because no one ever went that way and he was never allowed to go there himself. When he was sitting out of doors mending the nets, and all alone, he would often look eagerly to the North.<sup>8</sup>

<sup>7</sup> *Ibid.*, pp. 64-65.

<sup>8</sup> Lewis, C. S., *The Horse and His Boy*, London, Collins, 1980, p.11.

作者ルイスも幼少期から遠方の世界への憧れを持ち、その憧れは Shasta によって表現されている。作者自身7歳で新しい家に移ってから、北西を眺めて心惹かれる体験をしている<sup>9</sup>。ルイスはその時の経験を思い起こし、この場面を描いたのであろう。

Shasta の家にある日 Calormen の貴族が来て、Shasta を奴隷として買いたいと父に申し出る。貴族と父の会話を聞いていた Shasta は、自分が父の実の子ではなく、赤ん坊の時に岸に流れ着いた小船に乗っていたのを拾われたことを知る。Shasta は今まで父親に虐待され、父をどうしても愛せなかったことを思い返す。ルイスはモーセの十戒「あなたの父と母を敬え」という戒めを用い、Shasta が生まれながらにして神の掟を体得し守ろうと努力していた人物として描いている。

Shasta は Calormen の貴族が乗ってきた馬のところに行き、あの貴族がどんな人なのだろうと口に出すとその馬は人間の言葉で Shasta に話しかける。馬は Bree という名で子馬の頃 Narnia からここへ来たことを告げる。Bree は Narnia を The happy land と呼び “An hour’s life there is better than a thousand years in Calormen.” と言う。これは聖書の「あなたの天幕にいる一日は千日にまします。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。」(詩篇 84:10) を指しており、神の国に対する表現である。Bree はこの作品中でも何度か口にするが、by the Lion’s Mane 等、言葉の端々で Aslan への信仰を見せ、自由な Narnian であるゆえに異国の神や偶像を拝まないと述べる。この姿はダニエル書のシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを想起させる。彼らは自分たちの信じている神以外は拝まないと固く信仰に立ち、王の金の像を拝まなかった。(ダニエル書 3 章) Bree はあの人のところへ奴隷に行くなら死んだ方がましだと言う。Bree は以前から Narnia に帰りたいと逃げ出す隙をうかがっていたので、Shasta と一緒に逃げることにする。

ルイスは執筆前に “Bree” という名を何度も耳にしていたことであろう。それは J. R. R. Tolkien の *The Lord of the Rings* に登場する地名だからである。Frodo たちホビットらが最初に Aragorn と出会った村の名前が Bree であった。Narnia においては馬の名となり、Shasta と Bree は共に逃げ出して Narnia を目指して旅に出る。

Bree と Shasta は北へと出発した。何週間も旅をしたある夜、別の馬が後ろからやって来る。追跡されていると思った時にライオンの雄叫びが聞こえ、彼らは懸命に逃げた。見知らぬ馬もライオンから逃げ、最終的に Shasta の乗る Bree と合流する。合流するとライオンは去って行った。このライオンは後に Aslan だと判明するが、ここで両者を出合わせるように導いていたのであった。

この描かれ方を始め、Aslan はこの作品中で聖霊としての働きを見せる。『ライオンと魔女』においては存在感を示し、贖罪という意味でキリストの役割を担っていたが、この作品

<sup>9</sup> ルイス、C. S. 著、『喜びのおとずれ: C・S・ルイス自叙伝』(早乙女忠、中村邦生訳)、富山房、1984年 [Lewis, C. S., *Surprised by Joy*, London, Geoffrey Bles, 1955], 14頁。

中での Aslan は姿を見せないようにし、あるいは姿を変え、主人公たちを導く聖霊の役割を果たしている。

この場で Shasta と Bree がライオンの追跡によって出会ったのは、Aravis とその馬 Hwin で、彼女たちもまた Narnia へ行くところであった。

Aravis はタシ神の子孫で貴族であった。継母の目論みで、年配の男と結婚させられそうになり、逃げてきたと言う。一行は Narnia まで共に旅をすることになる。やがて一行は Tashbaan の街を通過することになるが、そこで一行は離れ離れになってしまう。

街に入る前に Shasta と Aravis は知っている者に見られた時に気付かれないよう変装する。Aravis は普段は輿に乗って奴隷たちを従えてきたため、誰も自分に敬礼してくれないことを不満に思う。このように Aravis は貴族であることを誇る傲慢さを持ち、常に Shasta を見下す態度を取っていた。彼女の心の悪は作品の後半で Aslan に裁かれることになる。

Tashbaan では貴族が通る時には平民は道を譲らなければならない。Shasta はいくつかの輿が通るのを見たが、ある大きな通りで道を開けた時、Narnia の客人が通るのを見た。彼らは輿に乗らず自分の足で歩き、自由に軽やかな雰囲気で行って行った。それは『ライオンと魔女』で登場した Peter たちであった。

Tashbaan の人々は Narnia の人を the White Barbarian King と呼ぶ。タシ神を信じる人々にとって Narnia は野蛮国だが、Aslan を信じる Narnian は罪から救われ、自由にされた身であるゆえ、Shasta の目には自由で明るくたのしく映ったのである。この Narnia の人々は Peter たち一行であった。Shasta が見ているのも束の間、彼はその列にいた Edmund に Archenland の Corin 王子と間違えられて宮殿に連れて行かれてしまう。宮殿で Shasta は初めてフォーンを見る。それは Peter たちが Narnia から同行させた Tumnus であった。作者ルイスは『ライオンと魔女』について言及し、Aslan によって石像からよみがえった Tumnus と Peter たちの治世を描いている。

Shasta がその場所で耳にしたことは、Susan が王子 Rabadash に求婚されて、それを拒んでいることであった。Narnia の人々は、Tashbaan の街から逃げ出す方法を模索する。この時カラスが逃げる近道として墓から北西へ向かって砂漠を抜け、峡谷の間に入って川に沿って行けば Narnia の隣国 Archenland に出る道を知っていると告げる。結局 Peter たちは船上パーティーを催すと見せかけてそのまま船に荷を積んで逃げる策を取る。この時にカラスの示した道は Shasta の記憶に残り、後に Shasta たちの辿る道となる。

その夜、Shasta の部屋に本物の王子 Corin が戻ってきたので Shasta と入れ換わった。この「失われた双子」のモチーフはシェイクスピアの『十二夜』にも見られるものである。

Shasta は前もって決めておいた落ち合い場所、王たちの墓で Bree、Aravis、Hwin を待つ。Shasta は一人墓に背を向けて眠ろうとする。すると一匹の猫がやって来て傍に座る。この猫は、姿を変えた Aslan であり、自分の姿を表わさない聖霊の働きをここでも示している。遠くでジャッカルの声がすると猫は起き上がり、ライオンの雄叫びでジャッカルを追い払

う。そして猫をいじめたことがあると言う Shasta を引っ搔く。これは後にライオンに搔き傷をつけられる Aravis の姿を対比され、人の悪に対する報いを示している。

一方 Aravis は街で旧友に会い、かくまってもらう。そして翌日の夜、宮殿近くの城壁から逃げることにする。ところが行く途中で王子 Rabadash の企みを耳にする。それは逃げた Susan を取り戻すべく Narnia を襲撃し、隣国 Archenland をも夜襲して攻め取る計画であった。その後 Aravis は馬たちと墓で Shasta に合流する。街で聞いた互いの情報を話し、王子が攻め寄る企みを知らせるべく、一行は Shasta が聞いた近道で旅を急ぐ。

Shasta と Aravis はこのように Tashbaan で別行動を取るようになったが、これによってお互い重要な情報を得ることができた。さらに Shasta は Corin と出会ったことも人生を変える出来事となる。Corin が「Archenland でまた会おう」と言った言葉は後に実現するのを見る。

Shasta たちは急を知らせるために急ぎ、砂漠から峡谷へ入るが、Rabadash 王子の軍隊が後方にやって来るのを見る。Bree と Hwin らが急ぐ中、後ろからライオンが迫って来たために彼らはさらに全速力で逃げる。このライオンは Aslan であったことが後に判明し、この時は彼らが間に合うようにと最後の瞬間を全力で走るように急き立てたのであった。

Aslan とは知らない Shasta は、ライオンに襲われそうな Aravis たちを見て Bree から飛び降り、Aravis を助けに走る。この時 Aravis はライオンに肩を引っ搔かれ傷を負う。Shasta の一声でライオンは静まり、向きを変えて立ち去った。ここでは Aslan が彼らを急がせたことと Aravis への戒めの傷をつけるという二つの務めを終えたため立ち去ったのである。また Shasta は清く Aslan の目に叶う者であるので Shasta の声が聞かれたのかもしれない。

仙人の門に入り、皆はそこにとどまり休息するが Shasta だけが今すぐ道を一人で行き Archenland に知らせに行くように言われる。ここでも Shasta が実は選ばれし者である意味が含まれている。

仙人のところで Bree は、今まで自分が最高の軍馬であることを誇りとして Shasta を見下していたことを恥じる。同様に Aravis も貴族であることを誇り Shasta を見下していた傲慢さを恥じる。

“At least he ran in the right direction: ran back. And that is what shames me most of all. I, who called myself a war-horse and boaster of a hundred fights, to be beaten by little human boy- a child, a mere foal, who had never held a sword nor had any good nurture or example in his life!” [————] “Shasta was marvellous. I’m just as bad as you, Bree. I’ve been snubbing him and looking down on him ever since you met us and now he turns out to be the best of us all.”<sup>10</sup>

<sup>10</sup> Lewis, C. S., *The Horse and His Boy*, London, Collins, 1980, pp.119-120.

ここで仙人が Bree に対して話すことは、新約聖書からの引用とされている<sup>11</sup>。

“Do not think of yourself more highly than you ought, but rather think of yourself with sober judgment, in accordance with the measure of faith God has given you.” (Romans 12:3)

このように Bree と Shasta は別々の時を持つことで、それぞれが自らのアイデンティティを確認することになる。

Shasta は走り続け、林の中で狩りをしていた王を見つけ、Rabadash 王子が攻めて来ることを告げる。こうして Shasta は最初の役目を果たしたのであった。

### 3. Aslan との出会い

王と狩りの一行は馬に乗って迎え撃つ用意へ走り出す。Shasta も馬を借りて Anvard へ向かうが Shasta は手綱の取り方がわからず、皆から遅れを取ってはぐれてしまった。

Shasta は一人で馬に乗ったまま山中に取り残され、疲れて泣き始める。すると目に見えない何かが自分のそばにいる気配を感じる。Shasta は息がするためその存在を感じる。この存在はキリスト教の聖霊と非常に類似している。聖霊を示す語 ‘Spirit’ はヘブル語の ‘ruach’ に由来し、「息」という意味を持つ。新約聖書の使徒行伝 2 章では、キリストの弟子たちが集まっていた時に天から音がし、それぞれの上に舌のような形の火が現われたと、弟子たちに聖霊が下りる様が記されている。(Acts 2:2-4) また英国国教会の司祭らによっても、神の霊は神の息とされ、生命の力とされる考え方をしている<sup>12</sup>。作者ルイスは聖霊の概念を、息を用いることで描き、キリスト教の聖霊の姿と働きを示しているのである。

Narnia では Shasta が声をかけると、目に見えない存在からその声が返ってくる。

“Who are you?” he said, scarcely above a whisper.

“One who has waited long for you to speak,” said the Thing.

[……] “I was the lion.” And as Shasta gaped with open mouth and said nothing, the Voice continued. “I was the lion who forced you to join with Aravis. I was the cat who comforted you among the houses of the dead. I was the lion who drove the jackals from you while you slept. I was the lion who gave the Horses the new strength of fear for the last mile so that you should reach King Lune in time. And I was the lion you do not remember who pushed the boat in which you lay, a child near death, so that it came to shore where a man sat, wakeful at midnight, to receive you.”<sup>13</sup>

<sup>11</sup> Wagner, Richard, C. S. *Lewis & Narnia for Dummies*, Hoboken, Wiley, 2005, p.147.

<sup>12</sup> Church of England, *Sermons & Stories* <<http://www.sermons-stories.co.uk/pentecost.htm>>

<sup>13</sup> Lewis, C. S., *The Horse and His Boy*, London, Collins, 1980, pp.128-130.



ここで Shasta は身の上の不幸を嘆き、生まれ育った暮らしの厳しさや、逃げ出してきた旅の辛さを話す。Aslan はそれに耳を傾けた後、Shasta に身を明かす。Aravis に出会えるように追ったライオン、墓地で傍にいた猫でジャッカルを追い払ったライオンも、Rabadash の軍に追いつかれよう後ろから急ぎ立てたライオンも Aslan 自身であることを語る。さらには赤ん坊であった Shasta が舟に乗り、漁師の手に渡るようにしたのも Aslan であると告げる。こうして Aslan は姿を隠しながら Shasta の人生の全てを導き背後にいた。Aslan を知るようになるにつれ、Shasta も姿の見えない彼を信頼するようになる<sup>14</sup>。

ここにルイスの持つ信仰、人間の自由意志を尊重する神の姿をも垣間見ることができる。この箇所の記述からルイスの信仰において、神は人間に自分の方を向き知ってもらいたいと願っている、だが話しかけられるまで声をかけないところから、全ては人間自身の自由意志によってなされるべきと捉えられる。ルイスの信仰する神は「待つ神」なのである。そしてルイスは聖霊の働きを、Aslan を通して示している。それは Shasta が導かれたように、生まれる前からある働きに定められ、不思議な形で人生が導かれ、出会うべき人と出会い、助けを得る時に得て、使命を果たすというものである。

ルイスの信じる聖霊の働きは、ルイスがここで描いたように、目には見えないが人が生まれる前からその人の人生に携わり、常に正しい方向へと導いてくれているものと捉えることができる。

また Aslan は神とキリストの姿にも照らし合わせることが出来る。Aslan は Shasta に向かって自らを「わたしは、わたしだ。」と言う。これは出エジプト記 3:14 でモーセが聞いた「私はありてある者」という神の声と同じ言葉である。ルイスは聖霊の働きを示しながら、その中心は神であるという概念をも示している。やがて Aslan は Shasta に姿を表わし、そして消えて行く。この様子はキリストの姿と類似している。福音書でキリストが復活後、二人の弟子とエマオまで同行し、最後に姿が見えなくなった話を土台としているものと思われる。

姿を消した Aslan はそこに足跡を残しており、やがてその足跡から水が湧き出る。これはキリストの命の泉とされている。Shasta はその水へ入り、水を浴びて力を受ける。これはキリスト教の洗礼の象徴である。

#### 4. Narnia へ

Shasta は Narnia に入り、王子が攻めてくることを知らせ、任を果たした。Peter たちに出会い、Corin に誘われて Rabadash の軍との戦いに参加することになる。道中、昨夜

---

<sup>14</sup> Schakel, Peter, J., *Reading with the Heart: The Way into Narnia*, Grand Rapids, William B. Eerdmans, 1979, pp.92-93.

Aslan と歩いた道を明るいところで見ではじめて Aslan は Shasta を守るように崖側を歩いてくれたことを知る。Rabadash との戦いで Rabadash は即座に敗れる。

一方 Aslan は Bree と Aravis に現われる。Bree に姿を現わした Aslan の場面は、福音書において復活を疑うトマスにキリストが現われた場面 “Put your finger here; see my hands. Reach out your hand and put it into my side. Stop doubting and believe.” (John 20:27) を想起させるものであり、その際のキリストと同様に Aslan も自らの体を指し示して触れるように言う<sup>15</sup>。Bree は軍馬としてのプライドに固執していた愚かさを反省する。ルイスはここで Bree がそれまでの自己概念を壊し、新しい人格を得たことを示している。

さらに Aslan は Aravis に対して、何故彼女が肩に傷を負ったか説明をする。それは Aravis が家から逃げ出す際、Aravis が奴隷に薬を飲ませて眠らせた、そのため奴隷は背中に鞭打たれた、Aravis が受けたのはその傷の報いであった。Aravis は自らの報いを受けたと知って悔い改める。ここではルイスは “the Lord disciplines those he loves, and he punishes everyone he accepts as a child” (Hebrews 12:6) という言葉を用いてこの場面を描いたのであろう。その後 Bree も Aravis も各々が静かに Aslan との会話を思い起こし、自らの在り方についての考えを深める。こうして Aslan によって両者は心の悪を知り、改めて新しい人格を得るのである。

その後戦いを終えた Shasta が彼らの所に戻って来る。彼はもはや Shasta という名前ではなかった。彼は Archenland の王と会い、実は Shasta は王の長男で Corin の双子の兄、Cor 王子であったことが判明した。Cor は赤ん坊の頃、「将来 Archenland を救う者となる」と預言され、それを悪く思う者に Cor は誘拐された。Cor は小船で逃げて岸に辿り着いて漁師に拾われ、Shasta と名付けられて育てられたのであった。不思議なことに Shasta は王子であることが判明する前に、敵が攻めてくることを王に告げ知らせるという、預言通りに Archenland を救う役目を果たしていたのである。

この件である Shasta の生き方は、川に流されて王女に拾われた旧約聖書のモーセと類似しているが、創世記のヨセフとも類似が見られる。ヨセフは奴隷として売られたが、やがて家族を飢饉から救う存在となる。“You intended to harm me, but God intended it for good to accomplish what is now being done, the saving of many lives.” (Genesis 50:20) ルイスはそのキリスト教信仰と知識によって、旧約聖書のモチーフをも作品の中に取り入れることに成功している。

物語の終盤では Cor は生まれた時からの人生全てを Aslan が導いてくれていたことを述べ、Aravis は彼に対して今までの態度を謝罪する。こうして Aravis は Aslan によって初めて口に出して悔い改め、新しい人生を始めることが出来たのである。

---

<sup>15</sup> Wagner, Richard, C. S. *Lewis & Narnia for Dummies*, Hoboken, Wiley, 2005, p.147.

## おわりに

最後の章で Aslan は皆の前に姿を現わして Rabadash を裁き、その後姿を消す。その様子は新約聖書で復活後のイエスが弟子たちに現われ、天に昇る様に類似している。そのためルイスは福音書からそのイメージを得たものと思われる。福音書の場面では、キリストは弟子たちにこう言う。

I will ask the Father, and he will give you another Counsellor to be with you forever. (John 14:16)

The Counsellor, the Holy Spirit, whom the Father will send in my name, will teach you all things and will remind you of everything I have said to you. (John 14:26)

ルイスがこの作品で描いた Aslan も、常に人と共存し、全てを教え、全てのことを思い起こさせ、人生を導いていた。その意味で聖霊の性質をも持っているといえる。

聖霊は常に人間と共に存在して働くルイスは考える<sup>16</sup>。ルイスは神、キリスト、聖霊の三位一体の概念を “The Three-Personal God” として『キリスト教の精髓』でこう述べる。

People already knew about God in a vague way. Then came a man who claimed to be God; and yet He was not the sort of man you could dismiss as a lunatic. He made them believe Him. They met Him again after they had seen Him killed. And then, after they had been formed into a little society or community, they found God somehow inside them as well: directing them, making them able to do things they found they had arrived at the Christian definition of the three-personal God.<sup>17</sup>

ルイスはこの概念から、Aslan の姿を通して三位一体の姿を示し、中でもこの作品においては聖霊の働きを描いている<sup>18</sup>。Aslan として描かれた聖霊は、常に人と共に存在し人生を導くものとルイスは考えていた。さらにルイスは『ライオンと魔女』でキリストの贖罪、続く『魔術師の甥』では神の天地創造の姿を描いている。Aslan は三人格を持ちつつ一人であるという、三位一体の重要な一例として描かれている。

この物語は「失われた子供」のモチーフとして始まった。さらに人は三位一体の神によって本当のアイデンティティを得る姿が示された。そしてルイスは作品全体を通して、Aslan

<sup>16</sup> Lewis, C. S., *Mere Christianity in Selected Books*, London, HarperCollins, 1999, p.433.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p.425.

<sup>18</sup> Ford, Paul F., *Companion to Narnia*, San Francisco, Harper & Row, 1980, pp.36,161-162,441.

の姿によって三位一体の聖霊の働きを描いた。

このように *The Horse and His Boy* は、死後復活したキリスト、そして聖霊としての働きが表わされた作品なのである。

(おかだ りか 本学非常勤講師)